

DC特化のKDDI、拠点間も可能なNTTコム バースト対応WANサービスの選び方

トラフィック上昇時に物理回線速度まで高速化(バースト)が可能なWANサービスをKDDIとNTTコムが投入した。互いにメリット・デメリットがあるため、顧客の利用目的を考慮して提案する必要がある。

文 藤田 健(本誌)

2009年7月1日、注目されていた2つのバースト対応WANサービスが開始された。「KDDI Wide Area Virtual Switch」(KDDI WVS)の「トラフィックフリー機能」(図表1)とNTTコミュニケーションズ(NTTコム)の「バーストイサアクセス」(図表2)だ。バースト対応WANサービスとは、WAN上で大量のトラフィックが発生した場合に、ユーザーの契約帯域を超えて、回線の物理速度まで通信速度を高速化(バースト)するサービスだ。

DC向けにパフォーマンス向上

同サービスを最初に発表したのはKDDIで、08年9月29日に概要を、11月19日に詳細をアナウンスした。

KDDI WVSは、今後拡大が見込まれるデータセントリック(情報資産集中化)の多様なニーズに対応するための「次期法人向けネットワークサービス」として発表したものだ。同社によると、「従来の広域イーサネットやIP-VPNサービスとは異なり、広域仮想スイッチによる、新しい概念のネッ

トワーク」だという。広域仮想スイッチとは、レイヤの異なる複数のネットワークを仮想的に統合し、あたかも1つの広域スイッチとして利用可能にすることをいう。

KDDI WVSで提供予定の機能は5つあるが、まずステップ1として提供を開始したのが、レイヤ3(L3)で提供されるブロードバンド回線に専用アダプターを接続してL2トンネリングを実現する「プラグイン機能」と、トラフィックフリー機能だ。

トラフィックフリー機能は、データセンター(DC)向けネットワークのパフォーマンスを向上させるもの。1本のアクセス回線内でDC向け通信と拠点間通信を論理的に分割し、DC向け通信を識別してLANインターフェース速度までバーストする。契約帯域が0.5M~9Mbpsの場合、10BASE-Tで接続しているので10Mbpsまで、10M~90Mbpsの契約時は100BASE-TXなので100Mbpsまでバースト可能だ。

一方、NTTコムのバーストイサアクセスは、5月25日に発表したもので、同社のVPNサービス「e-VLAN」「Arcstar IP-VPN」やインターネット接続サービス「ビジネス OCN」のアクセスメニューとして利用できる。

特徴は、アクセス回線の物理速度の10%の帯域を確保(保証)しつつ、物理速度までバーストできる点だ。提供メニューはe-VLAN/Arcstar

図表1 「KDDI Wide Area Virtual Switch」のトラフィックフリー機能

